

龍馬とお龍が新婚生活を送った「自然堂」は、実に質素な印象。「幕末維新村」に再現されている。和ろうそくに照らされた膳には、下関名物のふぐ刺と酒が並んでいる。



江戸に再現された「自然堂」 ～幕末維新村～

“維新を感じ語り合える幕末の聖地”をテーマに、江戸ドームそばに開館した「幕末維新村」。2階には、幕末歴史ファンの市民らによって再現された「自然堂」がお目見え。龍馬と



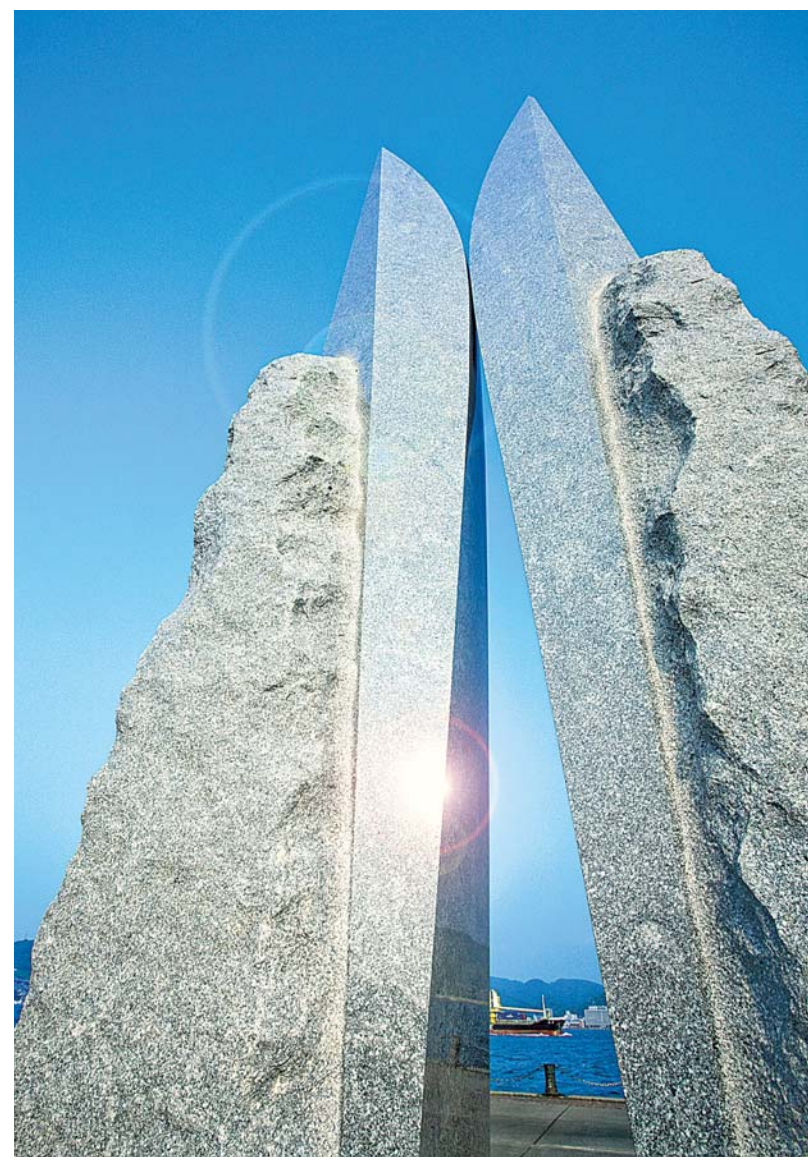
お龍の終の住処となった3帖の部屋には、愛用の亀山焼にふぐ刺が盛りたいつもの晩酌風景がセットされている。薄闇に響く波音まで聞こえてきそうなほどリアルだ。他にも遊廓の一室、龍馬の刀のレプリカなど幕末に生きた志士達の魅力がぎっしり詰まっている。

(下関市赤間町4-9 / ☎083-232-9338 / 10時～17時 / 水曜休み / 2階200円)

巖流島のエピソードは、さらに微笑ましい。お龍の述懐によると「或晩龍馬と二人でこっそりと小舟にのり、島へ上がって煙火を挙げました」というからびつくり。当時の花火って!?! 「火の玉みたいなのろし花火を龍馬自ら調合して、実験がてら上げたのでしよう。私はこれを恋の花火と名づけ、講演で話すとき盛り上がるんですよ」と古城さんが笑顔を見せる。

夕刻、定期船で巖流島に初上陸。宮本武蔵と佐々木小次郎の像がある小高い丘に立つと、本州と九州を結ぶ関門橋が一望できる。「ふたつの島陰は、龍馬とお龍が手と手を結びあっているようにも見えませんか」という古城さんのロマンティックな話に耳をかたむけつつ、ふと足下を見れば、ん、幸せを運ぶ四つ葉のクローバー発見! ここぞとばかりに目を皿のように探した。当時はこんな外来種はなかっただろうけど、案外、お龍も龍馬そっこのけで自分の世界に浸っていたのかもしれない。

あるかぼーとに建つ「青春交響の塔」



帰りの船から、空に向かってそびえるモニュメント「青春交響の塔」が見えた。高杉晋作(1839-1867)と龍馬の友情に思いを馳せ、カメラを向けた。

その夜は、かつては華やかな遊郭街として知られる末広稻荷神社周辺の料理屋でひれ酒など少々。酔いが回るにつれ、ふぐ刺をつまみながら龍馬と差しつ差されつ：なんて妄想に浸る私は、すでに立派な歴女でしょうね。しかし、龍馬も罪な男だ。遊廓から朝帰りした時も三味線片手にお龍にあてた歌を贈り、笑わせてケムに巻いてしまうのだから。きつと理屈じゃない部分でこの人なら仕方ないと思わせてしまう、そんな人間味あふれる人徳があったのだろう。